



『親鸞聖人七百五十回大遠忌についての消息』をいただいて (二)

千葉 乗 隆 (ちば じょうりゅう)

明治五年（一八七二）十一月、政府は太陽暦の採用を布告し、同年の陰暦十二月三日を明治六年（一八七三）一月一日と決めました。

この改暦によって、本願寺は「祖忌祥忌告諭書」を發布して、親鸞聖人の御降誕・御遷化の日をつぎのように改定しました。

「祖師親鸞聖人“降誕”承安三年癸巳四月朔日。紀元一千八百三十三年第五月廿一日。“在世”三万二千七百四十八日。“寿算”八十九年七個月廿七日。“遷化”弘長二年壬戌十一月廿八日、紀元千九百二十三年一月十六日」

右の告諭書にみえる紀元というのは、『日本書紀』の神武天皇即位の年から起算した日本紀元で、明治五年に政府が改暦した時にこれを定め、以来第二次大戦終結まで用いました。

改暦にともない、明治七年の報恩講は一月九日から同月十六日まで勤修されました。

聖人のご降誕の月日については、いろいろな説がありましたが、四月一日（新暦五月二十一日）説を採用し、明治七年に本願寺で初めて降誕会を営み、のち大学林（龍谷大学の前身）なども協賛して盛大な法会になりました。



第二十二代鏡如上人のとき、宗祖の法要を大遠忌、蓮如上人は遠忌、歴代門主は回忌と称することになりました。

明治四十四年（一九一一）に宗祖六百五十回大遠忌法要が勤修されます。

それまで宗祖の法要は三百回忌以降、三月十八日から二十八日まで勤修されていました。しかし、このたびの六百五十回大遠忌法要は期日を二期に分け、第一期は三月十六・十八・二十・二十二・二十四と隔日に五日間、第二期は四月八日から十六日まで隔日に五日間とり行いました。

この措置は参詣人の混雑を防ぐためでした。参詣者の総数は百万四千人に達しました。このころ鉄道網はすでに日本全国に行きわたっていましたので、団参列車が編成され、その発着駅として、鉄道院は本願寺に近い梅小路に臨時停車場を設置したのです。

この大遠忌に百万をこえる人びとが参詣した背景には、「親鸞聖人にかえれ」という当時の風潮がありました。

明治中期に、真宗寺院に所蔵する親鸞聖人のご真筆といわれる文書や経典などを、科学的な歴史研究法で調査した結果、疑わしいものが続出しました。さらに覚如上人の著わされた『親鸞聖人伝絵』をも疑問視し、親鸞聖人の存在を否定する学者も出ました。こうした中で聖人の筆跡を丹念に研究する学者によって、聖人の実在が確認されます。このような聖人の存否についての論争を通して、聖人を再認識する動きが高まったのです。

その後、大正十年（一九二一）に親鸞聖人の内室恵信尼さまのお手紙（『恵信尼消息』）が本願寺の宝蔵から発見され、これによって聖人の存在についての疑いが解かれるとともに、『親鸞聖人伝絵』の信頼性が高まって、聖人のご業績の解明に大いに貢献したのです。



親鸞聖人七百回大遠忌は第二十三代勝如上人の昭和三十六年（一九六一）に勤修されました。

昭和二十年（一九四五）の第二次大戦終結後の混乱を経て、昭和二十六年（一九五一）には講和条約が締結され、日本の社会と経済は安定に向かって歩みはじめました。

昭和二十九年（一九五四）に七百回大遠忌を勤修する旨のご消息が發布され、ここに宗門の総力を結集した大遠忌を勤修するとともに、宗門の活性化をはかる諸計画が立てられました。このたびの即如門主のご消息に「七

百回大遠忌に際して始められた門信徒会運動、重要な課題である同朋運動^{どうぼう}の精神を受け継ぎ、現代

社会に^{こた}える宗門を築きたいと思えます」と述べられていますが、このときに始められた門信徒会運動と、そして同朋運動の二つの取り組みは、今後もひきつづき推進すべき重要な課題であることを指摘しておられます。



七百回大遠忌法要は三月十日から二十一日までと、四月四日から十六日までの二期とし、一日二回の法要を行い、全期間四十四回の法要が執り行われて、四十八万人が参詣しました。

第一期法要終了の翌日三月二十二日には第一回世界仏婦大会が御影堂で開催され、日本はもとより世界各地から二千五百人の会員が参加し、「念仏を社会に」というテーマのもとに熱心な討議が行われ、それ以来、仏教婦人会の活動は世界的規模へと発展しました。

また記念事業としては、龍谷大学に深草学舎を開設し、まず経済学部を、ついで経営学・法学の各学部を設置し、大宮学舎には仏教文化研究所と仏典翻訳部を設けました。

さらに記念出版事業として、浄土真宗の聖典を意識する聖典意識編纂委員会と、本願寺史を編集する本願寺史編纂所が設置され、記念出版物の刊行に当たりました。

施設としては本願寺会館と門末接待志納所が新築されたのでした。

（本願寺史料研究所長）